選考委員特別賞
最相葉月賞

バンド道（みち）

北九州市立思永中学校　一年
梅田　明日佳

僕の所属しているロックバンド、「OVERDRIVE（オーバードライブ）」は、父が作りました。発足十六年になります。父は大の「THE ALFEE（アルフィー）」ファンで、十周年を期にアルフィーがそうしたように、「THE」をつけて「ジ・オーバードライブ」にしたいと提案したけど、あっけなく却下されたそうです。

OVER DRIVEとは、増速駆動という意味で、「もっと早く、もっと前へ進め」という願いが込められていますが、大抵のプログラムにかっこわるくカタカナで載り、ひどい時は「オーバードライ」と、ビールみたいになっていたりします。

父は会社で時々、

「えっ、梅田さん、ギターもするんですか。」と驚かれます。なぜそうなるかというと、父はガンプラ作りも好きで、作ったプラモの写真を会社の人に見せたりするからです。

今日は、そんな父と僕の、ギターにまつわるあれやこれやをお話しします。

父がギターを始めたのは、高二の時です。テニス部で後輩にレギュラーの座を奪われ、つきあっていた女の子にもフラれた父は考えました。

「何かしないと、自分はカラッポになってしまう。」

そこで、アルフィーの高見沢俊彦のファンの父は、エレキギターをすることにしました。早速ギターを買いたかったのですが、それには越えねばならぬ険しい関所がありました。

じいちゃんです。

じいちゃんは、今や絶滅危惧種Ａ種に指定されている、ガキ大将がそのまま大人になった典型的な頑固オヤジで、テレビに沢田研二が出ていたら、「あげなチンドン屋の真似事やっちょるとか、あっちあられんことじゃ。」（大分弁で、「絶対にあってはならない」という意味）と言っていたそうです。当時はバンドブームで、「イカすバンド天国」という番組が流行っていて、「お前がそげなことしたら、ちちまわすぞ。」（北九州風に言うと「ぶちくらすぞ」）と言うじいちゃんが、普通に考えたら、エレキギターなど許すわけがありません。しかも、お金がもったいないからと、柔道の黒帯をとらなかったような豪傑です。

考えた父は、「クラスで十位以内に入れたら、ギターを買う権利をください。」という、何とも中途半端な提案をしました。それを聞いていた父の姉は、

「バカ！お前、死にたいのか！」

と思ったらしいのですが、なぜかあっさりと安宅の関は通れました。じいちゃんは、買っても続かないだろうと思ったのかもしれません。じいちゃんにその時の気持ちを聞いてもあまり覚えていないそうです。

このようにして父のギター人生は始まりましたが、最初の頃は、ギターの弾き方の本に自分の好きな曲がなくて、チューニング（音合わせ）ばかりやっていたそうです。それから、普通ならコード進行やストロークを練習するところを、父は高見沢さんの真似をしたいがために、いきなりライトハンド等のハデなテクニックを練習しました。初ステージは高校の文化祭で学ラン姿でレッドツェッペリンの「移民の歌」と「フレンズ」をしました。博多まで「イカ天」のオーディションにも行きましたが惨敗。高見沢さんの次に自分が上手いくらいの気分でいた父は、ガッカリしたそうです。その後もいくつかのバンドでギターを続けました。

さて、我がＯＶＥＲ　ＤＲＩＶＥは、オリジナル曲を演奏するバンドですが、その曲は父が作っています。

父が作詞作曲をするようになったのも、またもや女の子にフラれたことがきっかけでした。ショックから立ち直れない状態で、父はアルフィーのコンサートに行きました。そして、最後の曲「ＡＬＷＡＹＳ（オールウェイズ）」を聞いていた時に、突然、

「高見沢さんは何で、こんな素晴らしい曲が作れるのだろう…、まてよ、自分もミュージシャンのはしくれ、出来ないはずはない！」とひらめいたのです。

「こうしちゃいられないぞ！」

早速、今の気持ちを書いた曲を作って、フラれた彼女に聞いてもらったら、「けっこういいじゃん。」と言われました。友達もほめてくれたので気を良くした父は、この曲をコンテストに出したら、三等になりました。エンジン全開になった父は、半年で三十五曲作りました。少し後の話ですが、ポニーキャニオンの作曲家オーディションで高見沢さんが審査員だった事が、父にとっての一生の思い出です。「大分って（名物が）何があるの？」と聞かれて、あがりまくっていた父は「吉四六漬けです。」と、そうでもないものを言ってしまったそうです。それにしても、失恋のパワーはすごい！そして、そのパワーを二度もうまいこと活用した父はすごい！と感心します。

こうして、自分の曲に自信を持った父は、自分の曲をやってくれるバンドを探して走りまわりました。しかしどこも加入させてくれませんでした。父はしょげくりかえっていましたが、またもやひらめいたのです。

「自分の曲をやってくれるバンドがみつからないなら、自分でたちあげればいいじゃないか！」

早速、楽器屋にメンバー募集のはり紙をして念願のバンドが結成され、自分のオリジナル曲を演奏できるようになりました。そして十六年、ＯＶＥＲ　ＤＲＩＶＥは、何やらかんやらで、ちょっとずつメンバーが変わりながら、出張等のピンチもくぐり抜けて、地域のイベントでけっこう活躍しています。

そんな訳で僕は、父の友達が来て酒を飲みつつギター

を弾くところや、時々誰かがギターを習うのを見ながら育ちました。しかし、僕は四分の三スケールのアコギを幼稚園の時に買ってもらっているのに、プーさんの絵の付いたおもちゃのウクレレで満足する子どもでした。幼稚園に入る前に、ヤマハ音楽教室に行っていましたが、一回も休まなかったのに、りんごのマスコット「プップル」のシールが台紙いっぱいにならなかった事がショックで続きませんでした。プップルシールがそろってないのに、次のクラスになったのが僕には分からなくて、プップルが来ないからシールがもらえないと、毎回泣いていました。母は、まさかそんな理由で僕が泣いているとは思わずに、ヤマハをやめさせてしまいました。一年前に初めてこの事を母に話したら、母は開いた口がふさがらないといった様子で、「あっちゃん、残念やったねえ。あのまま続けとったら合唱の伴奏とか弾けたのにねえ。いまさらピアノやりたいと言っても父さん月謝出してくれんよ。」と言いました。今思えば何てもったいない事をしたんだ、ピアノが弾けたら学校でカッコいい所を見せられたのに…と残念でたまりません。

話は脱線しましたが、僕はギターを三本持っています。一つはさっき紹介したアコギ、もう一つは父の友達からもらったグレコ国産第一号のレスポール、そして機動戦士ガンダムのビームライフル型のギターです。この変型ギターは、父が出張した時、リサイクルショップで見つけました。これは、ビームライフルの型をしているだけでなく、スイッチを押すと、「ズギューン」と鳴ります。「動作確認していません、３９９８０円」と書かれているこのギターを父は一度はあきらめて帰ったけど、次の週には僕のギターとして我が家にやってきました。ギターの部分が新品だったので、前の持ち主が、「ズギューン」の所が壊れたので売りに出したのだろうという予想は的中しました。父は頑張って修理しました。そして復活したギターを持って、行きつけの「まっさんの模型屋」に行きました。店で待っていた友達が喜んで持ったり鳴らしたりする中、店長のまっさんはガンダムの名シーン「ラストシューティング」のポーズをし

ました。五kgもあるギターを片手で空に向けて真っすぐ持ち上げたまっさんは、手をブルブルさせて、「は、早く撮って下さい！早く撮って下さい!!」と言ったそうです。僕はそれをみられなかったので残念です

そうして四年生の秋に、僕はイントロで、「ズギューン」を入れ、「とべガンダム」で初舞台をふみました。その後、五・六年生で夜宮まつり、六年生で起業祭やはたのステージに出ましたが、父に勧められて「ちょっと楽しいから出たい」くらいの気持ちで間に合わせで練習して、祭が終わればまたプラモを作って遊んでいました。

ところが、「卒業まであと〇〇日」なんていうようになったある日、僕のギター魂に火をつける事件が起こりました。母の友達がギターを習いにうちに来た時、同級生のすずなちゃんが一緒にやってきました。父は、「せっかくやけ、すずなちゃんも弾いてみるかね。」と言って、Cのコードをジャーンと弾いてみせました。すると、ふむふむと見ていただけのすずなちゃんがいきなりジャーン！

「え〜〜〜っ！」

僕は目玉がビョンビョンビョンととび出しました。

すずなちゃんは、あっという間に一曲弾けるようになり、何事もなかったかのように帰っていきました。僕はギターだけは、器用なすずなちゃんにも負けないと思ったのが、こんな有様で真っ青になりました。それからは、負けてたまるか、という気持ちで毎日練習をするようになりました。指の痛さも忘れて、「二時間経ったけ、もうやめり。」と言われるくらいでした。なので、友達でライバルのすずなちゃんが中学生になる前に引越してしまったのは、とても残念でした。

小学校生活も終わりに近づいたころ、クラスでお楽しみ会をすることになりました。僕は友達に「紙しばいでもしようや。」と約束しました。ところが、その友達は他の子とも約束してしまい、「僕もまぜてくれない？」

と言ったのに、その子は「ゴメン、無理なんよ。」と言ったのです。相当ムカつきましたが、すぐに「何か他の出し物を考えないと。」と思い直しました。その頃、「六年生を送る会」という行事で、在校生へのお礼として、「忍たま乱太郎」の「勇気100％」を練習していたので、これをギターで弾いて、クラスのみんなをビビらせようと思いました。父がコードをひろってくれて、僕は毎日猛練習しました。そのうち余裕ができて、イントロ前にメロディーを入れたりして、どんどんカッコよくなりました。「絶対ウケる。」と父は僕よりはりきっていました。

四時間目のお楽しみ会で、僕は一番はじめにエントリーされました。僕は何の曲をするか、司会の人にも先生にも誰にも言っていませんでした。二十七人のイスが輪になって、自分の場所に座ったまま、僕はゆっくりとメロディーを弾きはじめました。周りが、

「おっ？」

「あっ、忍たま？」

となりました。

僕は歌いはじめました。何人か小さい声で歌っていました。ノーミスで弾き終わった時、誰かが「ウメ、すげえやん。」と言いました。もうこれでお楽しみ会が終わる、ってくらいの拍手がおこりました。

休み時間はいつも図書室で過ごしていて、クラスの友達とあまり遊んだことがなかったけど、この日の昼休みは違いました。他のクラスからも、「もっぺん弾いて」と女子が何人か来ました。すずなちゃんも廊下から見ていました。クラスの男子が「ギターさわってもいい？」と言いました。僕は「いいよ。」と言いながら、とてもいい気分になりました。二年生のころ好きだったけど、相手にしてくれなかった女子が来て、「すごいじゃん。」と言いました。そして、ギターをしている合唱部の有元先生の話で盛り上がりました。この日の僕はスターみたいになっていました。

会社から帰った父に話すと、自分のことのように喜んでくれました。そして言いました。

「うらやましか〜。」
父はギターを弾けたら女の子にモテると期待していたのに、バンドでモテるのはボーカルばかりで、自分はライブに出ても目付きのこわい兄ちゃん達に「良かったっス」と握手を求められたりして、理想とは全然違ったらしいのです。ベースの兄ちゃんと「バンドやってたら女の子にモテるなんてのは都市伝説よねー。」とか、「頑張ったのに残ったのは、マニアックなテクニックだけやねー。」と意見が一致しているそうです。

お楽しみ会から数日後、「輝く未来へ向かって巣立ちゆくこども達、明日に向かってはばたけ」など大げさに応援されながら、大雨の中、僕はついにめんどくさかった小学校を卒業しました。卒業前からクラスのあちこちで、部活をどうするかという話が出ていました。僕は、ひと足先に中学生になった友達から、「うめちゃんは陸部に向いてるよ。」と陸上部を勧められていました。僕と一緒に陸上部で活動したいという先輩の気持ちはわかりましたが、僕の体力ではついて行けなさそうだし、プラモは作りたいし、夏休みはゆっくりしたいので、すごく悩みました。母は、「中学生の時、吹奏楽部に入っていたけど、練習が遅くまであったから授業中眠くてきつかったよ。部活は楽しかったし、いい思い出になったけど、テストはいつも一夜漬けやった。勉強が足らんで将来の夢がしぼられるようなことになるなら部活はおすすめできんよ。」と言いました。僕は将来大学に行くとして、何を勉強したいかまだ決まっていません。ロボットやからくり人形を作る勉強もしたいし、日本史を勉強して磯田道史さんみたいにもなりたいので、部活はやめとこうと思いました。そして、ある日ドラえもんのまんがを寝転がって読んでいる時に父から、「あっちゃんバンド入る？」と聞かれて「うん。」と答え、自然にバンドの練習に行くことになりました。

春休みが終わり、僕は中学生になりました。残念ながら、小学校で聞いた「輝く未来」は中学校のことではあ

りませんでした。中学校は教科で先生が変わるのが面白いけど、授業中に寝たら減点、提出物に書きもれがあったら減点、発表で手を挙げた時の指が開いていたら減点と、何をやったら減点になるのかわからない恐ろしい所です。そして、一年生の時の成績も高校受験で参考にすると言われ、気が休まることがありません。ところが、部活が大変なのか、勉強をがんばりすぎなのか、授業中に眠たくなる人がいます。「今の授業も受験に必要」で、「部活は人間形成に大切」と言われても、限られた時間でどっちもをうまくやるのは難しいのではないでしょうか。大人には「ワークライフバランス」という言葉があるけど、中学生には「勉強と部活バランス」の考えを取り入れたほうがいいと思います。チームワークは大切だけど、ひとりひとり、勉強や趣味の活動のちょうどいい量が違う、という考えが抜けおちると、勉強がわからなくていやになったり、部活がハードすぎて辛くなる人が出ると思います。体育大会で部活の行進があった時、僕のクラスでテントに残ったのは三十四人中三人でした。ほとんどの人が部活をしていて、学校のレポートが間に合わなかったり、豆テストの準備ができない人が多いのなら、それは、勉強を頑張りたくても、時間が足りなかったり、体がついていけなくて困っている人もいるのではないかと思うのです。

僕は基本、毎日家でギターを練習しますが、宿題の多い日や豆テストの準備をしたい日は、しないこともあります。そして、毎週日曜日に、バンド練習をしています。アンプにつないで弾くと、でっかい音が出て、学校でいやなことがあっても発散できます。「明日からまた学校かあ。」と下がったテンションも回復します。メンバーの兄ちゃん全員にいいよと言われて、僕は正式にバンドのメンバーになりました。父の曲で全部弾かせてもらえるのはまだ一曲だけど、頑張っています。僕が加入したことで平均年齢が二十九歳になり、父が出てみたい「オヤジバトル」の出場権（平均年齢四十歳以上）はますます遠ざかってしまったけれど、いつか父と一緒に出場できたらいいと思います。

このお話を書くのに父にいろいろ取材して、「お父さんよかったね、お父さんの面白い人生が作文になるよ。」と言ったら、「え～そうかなあ。」と言っていました。父はウケようと思ってやったことはすべり、一生懸命にやったことがウケる面白い人です。

父は相変わらず、晴れた休みにはすかさずベランダでエアブラシを使っているし、僕は今、妖怪メダルの収集に夢中です。そんな父と僕のギター道がこの先どうなるか、お楽しみに！